

● 新指定答申文化財の概要

【種別】無形民俗文化財（民俗芸能）

【名称】大江の羯鼓踊

（おおえのかっこどり）

【所在地】伊賀市馬場 951（陽夫多神社）

【保持団体】大江羯鼓踊保存会

【概要】

毎年4月20日、陽夫多神社（伊賀市馬場）の春祭に奉納されている踊りで、県内で「かっこ（羯鼓）踊り」と総称される、風流（ふりゅう）太鼓踊りのひとつです。大江の羯鼓踊の起源は明確ではありませんが、寛永年間（1624～45年）に雨乞いの踊りとして始まったとも言われており、雨乞い祈願や祇園祭の除災のために踊られてきました。

基本的な踊りの体形は、神殿に向かって踊り子が2列縦隊となり、その外側に鬼が並びます。貝吹きと楽打ちは神殿側、歌出しは神殿側と鳥居側に分かれて並びます。踊り子は、浅葱色（あさぎいろ）の着物に、よもぎ色の小紋の裁着（たっつけ）姿で、腹部にさらしで羯鼓を巻き、背には「オチズイ」と呼ばれる花飾りを負います。オチズイは、細く割った竹に紙を染めた花と葉をつけて枝垂れ桜に似せた背負い飾りで、伊賀及び周辺地域のかっこ踊り、祇園祭に特徴的なものです。

大江の羯鼓踊は、中世末期の風流踊りの系譜をひく、伊賀地域の太鼓踊りの形態をよく伝えています。また、「じんやく踊り」という、伊賀地域を中心に近江・山城・大和・伊勢など広域に分布する、特徴的な曲を伝承しており、芸能の発生や成立過程を知る上で重要な民俗芸能といえます。

